

保健教育における「罹患性」の自覚を高める
教材開発の意義

佐 見 由紀子

要旨

学校における保健教育は、子どもたちの健康や安全の問題の予防や解決のために、また現在および将来、健康で豊かな生活を送るために重要である。保健教育における教材開発は、これまで、保健教科書教材をはじめとして充実してきている。しかし、保健教育で学習する健康問題は、これから自分に起こるかもしれないが、起こらないかもしれないものであるため、子どもにとって身近と感じられないことが課題となっている。そこで、学習する健康問題をいかに生徒が自分に身近な問題であると感じられるかが学習意欲を高めるために重要である。

この身近さに類似する概念として、保健行動理論における「罹患性」の自覚がある。また、これに加え、健康問題が重大であると感じる「重大性」の自覚の2つが保健行動を実践するうえで重要とされている。

これまで、国内では、ヘルスブリーフモデルに基づく教育介入の研究はあまりみられなかったが、国外では、さまざまな健康問題に対して、ヘルスブリーフモデルに基づく教育介入研究が行われており、一定の効果が認められている。ヘルスブリーフモデルの検証や意識調査から教育介入の必要性も指摘されていることから、保健教育への応用が可能であると考えられる。

また、これまでの保健教育では「罹患性」の自覚を高める教材の不足が指摘されていたが、過去の実践例をみると、「危機感」を高めることを意図した教材がみられた。しかし、「罹患性」の自覚と「重大性」の自覚を高める教材は区分されずに紹介されていた。他にも、「罹患性」の自覚を高めることを直接的に意識したものではないが、「共感・実感から分析へ」高める考えや、権利としての健康の概念形成を意識した考えに基づく教材がみられ、「罹患性」の自覚は意図していないが、身近さを実感させる教材の工夫がみられた。さらに、無意識的に「罹患性」の自覚を高めることにつながる教材例もみられた。ただし、これらはいずれもその効果性の評価が不十分であった。以上のことを踏まえ、今後、保健教育において、ヘルスブリーフモデルに基づく「罹患性」の自覚を高めることに焦点化した教材の効果性を実証的に明らかにしつつ開発し、保健教育への応用可能性を検討することが必要である。